

1. 単元 バasketボール

2. 研究主題との関連

身体と対話する学びが活性化する授業の改善

～自ら目標を設定し、学習到達点を理解しながら見通しをもって思考・判断と技能を高める授業～

(1) 単元について

6年生の子どもたちは『とらえる・かわす』運動（ボールゲーム）については1年生から5年生にかけて継続的に学習し、経験を重ねてきた。低学年では、鬼遊びやシュート場面に限定した1対1の攻防を中心とする攻守交替型のボールゲーム。また、中学年では、パスからシュートに主眼を置いた攻守交替型、攻守相乱型のボールゲーム。5年生では、広い空間で複数のメンバーの動きを作戦としてイメージするサッカーを学習してきた。これらは、シュートやパスをはじめ、攻め方や守り方の共有というように、把握する空間・時間とプレイヤーの数を増やししながら、自分のねらいに最適の間合い（スペースとタイミング）をとらえてゲームを楽しむ態度や能力の育ちに沿ったものである。また、ボールゲームでは、思考・判断の高まりから。子どもたちは、まず、自分のメンバーの特徴を把握して、これに応じた作戦を工夫し、次に、決まってきた作戦の中で自分の役割を果たすために動きを高めるというふう学習を深めていく。

本単元のBasketボールは、プレー中一人一人に与えられている時間・空間が少ない。そのため相手のマークをかわし、シュートをするには瞬時の判断が求められる。これまでの6年間の学習経験をもとに、動きづくり、作戦作りという面からもこれまでの経験からより深い学習活動が行われるものとする。

以上のことをふまえ、その時々発揮し駆使される態度、思考・判断、技能について、その具体を明らかにし子どもに示すことによってより主体的な学習が可能になる。自らの現状を理解するとともに次にめざす思考や技能がどのようなものか分かっていることで、子どもたち一人一人が「自分が学んでいく」実感を養い、より意欲的に、より主体的に「身体と対話する学び」に取り組むことができると考えた。

(2) 単元の目標

見通しをもって、協力して活動に取り組もうとする。【学ぶ態度】

メンバーの特徴にあった作戦を立てて、相手に応じた動きを工夫する。【思考・判断】

パスやシュートをしたり防いだりする動きを身につけ、ゲームで実行する。【技能】

(3) 授業構成の仮説

子どもの育ちを生かした活動構成

子どもの思考・判断の育ちによる作戦づくり、動きづくりという意識の流れに対応させて、リーグ戦 対抗戦という活動を構成する。リーグ戦では総当りの対戦によって、自分たちのチームの特徴をつかんで作戦を工夫していく。また、攻め方や守り方に対する理解を深めて作戦に合った技能を身につけていくであろう。また、後半の対抗戦では、力の似通ったチームとの対戦を通して、作戦に対する自分たちの動きをふりかえりつつ、展開するゲームの中で状況に応じた工夫がなされるであろう。

また、活動のまとめりごとに、自分の学習を振り返る場（評価セッション）を設け、学習活動の成果と課題を明確にし、今後、めざしていく姿を子どもたちが把握するようにする。

身体と対話をする学びをうながす指導者のはたらきかけ

まず、【学ぶ態度】については、子どもたち一人一人に学習計画の見通しをもたせ、円滑に学習活動が進んでいくようにする。また、一人一人が安心して自分の力を発揮できるチーム作りをねらいとし、練習や作戦作り、ゲームの結果にいたるまでの活動を支え、アドバイスをしながら支援していく。【思考・判断】に対しては、状況に応じて動きを判断することをねらいとし、作戦の工夫の段階では、作戦を遂行できるように味方の動きや相手の動きに対する予測や自分や相手の位置に対する判断を補助するようにする。また、動きの工夫の段階では、ゲームの状況から、工夫した動きができるようにその場ではたらきかけるようにする。【技能】に対しては、状況に応じて思うようなプレーができることをねらいとし、ドリブル・パス・シュートが練習できるようなセットメニューを作成し、単元を通して基本的な技能を高めることができるようにする。